
魂喰い

翼をください

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魂喰い

【Nコード】

N9520L

【作者名】

翼をください

【あらすじ】

学園バトルモノですかね？

ブローグとある研究所にて（前書き）

生まれて初めて小説書きました

まだまだ未熟なので、アドバイスお願いします

ブローグとある研究所にて

実験機材で溢れた部屋で、白衣を着た男性が二人、モニターを眺めていた。一人は20代前半、もう一人は30代後半といったところだ。

『内圧上昇、魔力純度、密度、共に上昇。』

「いよいよですね、幸裂さん！」

「ああ、人類の生き残りを賭けた戦いの始まりだ。長谷川、ここまですべて来てくれたこと、感謝する。」

「そんな、私は幸裂さんに憧れて、この道を目指して、このラボに入っただけです。助手として置いて下さっただけでなく、政府が極秘で進めていた、対《蠢蟲》武装の研究に誘って下さるなんて……」

「俺は君の能力を買って、この研究に誘ったんだ。自分に自信を持ちたまえ。」

このさいだ言っていないぞ。実は、この研究に反対だろ？」

「ええ、子供達にこんな運命を背負わせるのは少し気が引けます。」

「だが、しょうがないだろう。全12シリーズの《魂喰いの石》、これは俺達には扱うことが出来ない。扱うことが出来るのは子供、しかも適性の高い人間だけなんだ。」

『魔力の固体化に成功……』

No.1～12までの精製を完了』

突然、爆発音が轟き、甲高い非常ベルが鳴り響いた。

「幸裂さん！ な、何が起きているんですか！」

「……敵さんのお出ました」

「《蠢蟲》……」

と、次の瞬間、ラボの防護壁を突き破り、3メートルは優に越える蜘蛛の背に触手を生やしたような、異形のモノが、実験機材の溢れた部屋に這うようにして入り込んできた。

「まあ、魔力濃度の高い場所に現れる習性があるっていう論文があ

つたしな。確か、あの学者も《蠢蟲》に喰われて死んだんだっけな
あ…」

「く、くそ！」

長谷川はおもむろに《魂喰いの石》を掴むと、自分の手に爪を突き立て、傷を作った。

「バ、バカ野郎！そいつに血を与えるな！お前には制御出来ない、そればかりか生命力を吸いつくされて、待つてるのは死のみだぞ！」
「もし《魂喰いの石》が暴走したら、それを止める技術を持っているのはあなただけなんですから。さあ、早く…」

その日の夜のニュースで、幸裂と長谷川という会社員が轢き逃げにあつて、搬送先の病院で死亡が確認されたという報道が取り上げられた…

第1章 1話（前書き）

やっと1章を投稿です

第1章 1話

・・・ピピピッ、ピピピッ

(…朝の4時？目覚ましセットするのミスったか？
まあいいや、寝よう…)

(…夢か？もしかして、父さんが生きてた時の思い出？)

「いいかい？時砂。この石は、もし、時砂が危ない！と、思ったり、誰かを本気で助けたいと思った時に力を貸してくれる。大事にするんだよ。わかったね？」

(なんだ？あのガラス玉？なんか刻印がしてある…)

ガラス玉を締まった箱は父さんがくれたガラクタ入れだ…)

「うん！わかった！大事にす…」

「…と…さ、時砂、起きなさいって！時砂！！」

(…何だようるさいなあ)

「もう7時半！入学式あと1時間で始まるよ！」

(…入学式？…ああ、今日は高校の入学式だったっけ…ん

？7時半？家から駅まで自転車で15分、駅から学校までバスで35分、なんだ、間に合うじゃないか、ギリギリ、めちゃくちゃギリギリ…)

「新入生は式が始まる10分前には集合なの！ギリギリアウトなの

！」

「…マジか？舞奈…？」

「…うん」

「わかった、舞奈は先に行っててくれ。後から追いかける。」

「うん、じゃあ先に行くね」

「おう、気をつけてなあ…」

…さて、うるさい幼なじみも行ったし、もう一寝入りするか。どう

せ、俺なんて空気だしな……」

俺はまたベッドに入り、二度寝を開始した。

と、その瞬間、ドアが勢い良く蹴破られて舞奈が俺の部屋に入ってきた。

「またそんなネガティブなこと言って！

てか、うるさい幼なじみって誰のことかなあ？」

舞奈は指をポキポキと鳴らし、俺に詰め寄ってきた。

「ま、舞奈さん？じ、時間は大丈夫なのかな？」

「うーん、私はとっても優しいから時砂クンにヒントをあげるね。

…時計、見てみな」

俺は枕元に置いてあるケータイを開いて、その液晶を見た。

「…6時55分だな」

それを聞いた舞奈は口角を吊り上げて、

「そう、6時55分。

時砂クンは私の言ったことを鵜呑みにしたんですねえ、バカですねえ」

と、ニコニコしながら言いやがった。

（…顔は笑ってるけど、目が笑ってねえ！！）

「まあ、そんなところはどうでもいいの。うるさい幼なじみって誰のこと？」

凄く爽やかな笑顔だ

目が笑ってねえ（泣）

「舞奈、俺はうるさい幼なじみじゃなくて、麗しい幼なじみって言ったんだ。

だから、その思い切り振りかぶった拳を下げてくれ。いや、下げてください、お願いします。ほら、格闘技やってた奴が素人を殴るのは問題だと思うんだ。だからやめっ、ゴフッ」

（いくら格闘技経験者だからって一撃で仕留めるか！ヤバイ、体が動かねえ！）

「ほら、いつまで寝てるの？本当に遅刻するよ！」

…これが、戦いの世界に巻き込まれる前の、最後の本当に平和な朝だったなんて、俺は考えてもみなかった。

第1章 1話（後書き）

次の投稿はいつになるのやら・・・
次回もがんばります！

第2話（前書き）

第2話完成しました！！

第2話

「ねえ、そんなに痛かった？」

「寝起きに、いきなりの確なみぞおち狙いのパンチを受けて痛みを感じない奴を紹介してくれ。」

「はあ？そんなのいる訳ないじゃん。時砂ってそんなにバカだったっけ？」

「…舞奈、皮肉って知ってるか？」

「ん？何？まったく聞いてなかった。」

「…。」

ちなみに今、俺たちは駅の本スターミナルで隣信学園前行きのバスを待っている。

私立隣信学園、近隣の学校の中ではトップ3に入るレベルの学力を誇る学校で、ミッシヨン系のため、教会から援助金が出されているらしく、私立高校としては学費がかなり安い。そして今日はその学校の入学式、俺たちはその学校の新入生なのだ。

俺は片親っていうこともあって、あんまり金銭的な負担をかけたくないという理由でこの学校を志望した。（結局、特待生で授業料はタダになった。）が、舞奈にはこの学校を志望する理由が見当たらない。実際、勉強以外は人一倍出来る舞奈はいくつかの学校から声がかかっていた。そっちに乗っかっていれば、受験前に勉強を教えなくて俺に泣き付かなくて良かったし、学費の面でも得だったはずだ。勉強を教えているときに、一度だけ、「なんでこの学校に行きたいんだ？」と聞いたことがあったが、「時砂ってなんでそんなにバカなの…」と言って拗ねてしまった。

（…やっぱり女子の考えることはよくわからない。）

「あつ、バス来た。ほらっ、早く行くよ！」

「わかってるよ。ハア、だるい…。」

俺達はバスに乗り込み、後ろの席に座った。

「空いてるね、なんでだろ？」

「入学式は2、3年生が出席しないからだろ。」

「そっか…」

そしてドアが閉まり、『まもなくバスが発車いたします…』というお決まりのアナウンスを運転手がして、俺達を乗せたバスは発車しようとしていた。

「ま、待つてくれー！」

（なんか聞いたことがある声だな…）

バスの窓から後ろを見ると、真新しい隣信学園の制服を着たド金髪が全力疾走していた。

「あ、浅岡だ。おーい、あさおかー」

「おお、我が愛しの舞奈ちゃん！」

バカがこちらに手を振りながら走っている。

バカ、もとい彼の名前は浅岡海斗、中学のときに知り合って、それから舞奈に猛烈なアタックをし、それにことごとく気づいてもらえていないかわいそうなバカだ。だが浅岡はモテないというわけではない。初対面の女子には風貌のせいでドン引かれるか、怯えられるの二択だが、実際は話してみるとなかなか良い奴だし、容姿に恵まれているので中学時代は複数の女子から告白されている。しかも、かなり真面目なところがあって、加えてめちゃくちゃ勉強が出来るため、教師たちも浅岡のことをあまり注意できない。極めつけは県内のかんりの数の学校から学力面で評価され、特待生の誘いが来ていたということだ。ちなみに浅岡は、その誘いを全て蹴って俺達と同じ高校を選んだ。その理由は、「我が愛しの舞奈ちゃんと同じ高校に…」ということだ。まとめると、勉強のできるバカ。それが浅岡海斗だ。

「あつ、転んだ

…勉強はできるんだよな」

「うん、浅岡って素でバカなんだよね…」

（舞奈よ、お前も人のこと言えないぞー）

「な、何？人の顔じろじろ見て」

「いや、なんでもない」

「なんでもなくてしょ？何か言いたかったんでしょ？言つてよ！」

「なんでそんなに必死なんだよ？」

「それよりどうした？顔、赤いぞ？」

「！！！！っ」

「どうしたんだよ？」

「…なんでもない」

「お前こそ、なんか言いたいんじゃないか？」

「あ、もしかして2、3日前に借りたマンガか？あれなら家に帰つたらすぐに返すよ。」

「と、俺が言つと舞奈はなぜか少し怒つたように、

「今、私が着ている服について何かないの？」
と言つた。

「制服がどうした？別に普通じゃないか？」

「あ、もしかして見栄張つてちょっと小さいサイズで買つてキツいとかか？」

「舞奈ならありそうな話だ。」

「そう…時砂には、そう見えるんだ…」

「なんだか悲しみの中に少し怒りが混じっている表情だった。なんか悪いことしたみたいだ、何か褒めないと…」

「さ、さっきのは冗談だ。似合つてるぞ、制服」

「…本当？」

「おっ、表情が和らいだ。正解だったみたいだな。」

「ああ、本当だ。」

「そう、かな？」

「舞奈が妙にしおらしい。俺が気味悪がっていると、顔を真っ赤にしながら、

「か、かわいい？」

なんて訊いてきた。

なぜにそんなことを俺に訊く！

「時砂の脳内シュミレート」

・「ああ、かわいいぞ。」 「何言ってるの？キモッ」 冷ややかな視線

・「さあ？」 「はつきりしてよ！」 機嫌悪くなる、暴力

・「普通じゃないか？」 「……」 無言で暴力

……どう転んでもアウトじゃん（泣）

……暴力のない「ああ、かわいいぞ。」 でいこう。

「シュミレート終了」

「ああ、かわいいぞ。」

……さあ、どうなる！

「ホントに？」

舞奈は上目遣いで俺を見てきた。

（な、なんだ？舞奈がいつもと違う！）

「ねえ、時砂？」

「な、なんだ？」

「……私ね、時砂にずっと言いたかったことがあるの。」

「なんだよ？いきなりかしこまって。」

「わ、笑わないでよ！笑ったらボコボコにするからね！」

（やっぱり、いつもの舞奈だ。）と、俺は安堵していた。

（……ん？なんで俺は舞奈がいつも通りだってことに安堵してるんだ？）

「あのね、私、実は時砂のことが……」

と、舞奈が何か言い掛けたのと、ほぼ同時に、

「間に合ったー！！！！やあ、舞奈ちゃん、おはよう」

という無駄な大声と共に、バカがバスに乗り込んできた。

「ああ、おはよう、バカもとい浅岡」

「うるせーぞ童顔が！」

「…弱い犬ほどよく吠えるか、昔の人って良いこと言うなあ。」

「このガキ！」

「…アメやるから黙ってる」

「そんなので釣られるかよバカが！」

「…いないのか？」

「いや、いるけどさあ。」

「じゃ、少し静かにしてような？前のほうの席に座れ」

「おう！わかった。」

そして浅岡は一人、最前列の席に座った。

「ふう、やっぱりバカは扱い易くていいな。」

で、舞奈、なんだ？」

「……………なんでもない」

一体何なんだ。

その後、俺と不機嫌な舞奈とアメを嬉しいそうに舐めている浅岡を乗せてバスは学園を目指した…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9520/>

魂喰い

2010年10月28日06時07分発行